

|         |                       |
|---------|-----------------------|
| 氏名(国籍)  | 李 顯 周 (韓 国)           |
| 学位の種類   | 博士(文学)                |
| 学位記番号   | 博 甲 第 3025 号          |
| 学位授与年月日 | 平成 15 年 3 月 25 日      |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当      |
| 審査研究科   | 文芸・言語研究科              |
| 学位論文題目  | 戦時期の雑誌・映像メディアと太宰文学    |
| 主 査     | 筑波大学教授 名 波 弘 彰        |
| 副 査     | 筑波大学教授 博士(文学) 荒 木 正 純 |
| 副 査     | 筑波大学教授 博士(文学) 阿 部 軍 治 |
| 副 査     | 筑波大学教授 新 保 邦 寛        |
| 副 査     | 筑波大学講師 博士(学術) 秋 山 学   |

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、戦時期の太宰文学について、従来の研究にみられるように、私小説の視点からの分析や、あるいは時代を超えたテキスト分析にとどまるのではなく、同時代の雑誌及び映像メディアの役割を重視することで、太宰文学と同時代の関係性を分析することを試みたものである。作家あるいは作品の研究に取り組む際、作家と作品、そして読者という三者を媒介する雑誌メディアの存在を無視することはできない。特に戦時下という時代状況にあっては、雑誌メディアはたんに作品と読者を媒介するという役割以上のもの、すなわち国策のプロパガンダというまったく新しい役割を担うようになる。このような現象は戦時下の映画界についてもいえる。したがって、戦時期の太宰文学を研究する本論文は、その文学が雑誌・映像メディアとどのような関連をもって産み出されたものなのかという課題を追求するものとなっている。

本論文は二部構成をとり、全七章から成り立っている。

### 【本論文の構成】

#### 序章

#### 第 I 部

第一章 雑誌『若草』と太宰文学の変貌

第二章 「女生徒」と「皮膚と心」論－女性独白体とジェンダーの世界－

第三章 「女生徒」における『ユリシーズ』の翻訳と文体

#### 第 II 部

第四章 「十二月八日」と雑誌『婦人公論』をめぐる

第五章 「散華」論－三つの「死」の意味－

第六章 「佳日」における〈笑い〉の国策化－映像メディアとの接触をめぐる－

第七章 「惜別」論－「独立親和」と魯迅像のずれを中心に－

#### 結章

第 I 部では戦時期の女性向け雑誌と太宰文学との関連が三章にわたって考察されている。第一章では戦時期の太宰作品が数多く掲載された雑誌『若草』と、「愛」をモチーフとした三篇の作品、『燈籠』（一九三七年）『葉桜

と魔笛』（一九四〇年）『誰もしらぬ』（一九四〇年）との関係が考察されている。方法としては、まず雑誌購読者層を分析し、その購読者層との関係を通して三篇の主題が分析されるというものである。さらにはそれらの作品の主題を太宰の初期文学にみられる「愛」のモチーフと比較することで、その差異が明らかにされている。こうして戦時期の太宰文学のモチーフがほとんど雑誌メディアとの接触を通して形成されていることを結論としている。なお戦時期の太宰文学の文体の中心を占めている女性独白体にも言及しているが、次の第二章と第三章にわたって、この女性独白体の成立が正面から取り上げられている。第二章では女性独白体の成立の契機が岩波書店版の『ユリシーズ』の翻訳文体に影響されたことにあると捉えている。次の第三章では、女性の繊細な心理描写が目立つ『女生徒』（『文学界』一九三九年）と『皮膚と心』（『文学界』一九三九年）とが女性独白体に焦点を置いて分析されている。それによると、太宰が最初に女性独白体を用いた時期が女性向け雑誌『若草』の掲載と一致していることから、その文体は雑誌への作品掲載と深く関わっていることを明らかにしている。

第Ⅱ部では戦時期の太宰文学に特徴的な雑誌・映像メディアとの交流に規定された、いわゆる国策小説と言われている四篇の作品、『十二月八日』（一九四二年）『散華』（一九四四年）『佳日』（一九四四年）『惜別』（一九四五年）の考察を第四章から第五章にかけて行っている。この三章の考察を通して、戦時下という非常時に当局によって雑誌メディア及び映画業界に強いられた国策のプロパガンダが、太宰文学にどのような影響を及ぼしていたのが明らかにされている。具体的には、同時代の雑誌『婦人公論』『新若人』『日華学報』が行わざるをえなかった国策的編集と関連、さらに映画『四つの結婚』の映像分析との関連を中心にテキスト分析が試みられている。

第四章では、『十二月八日』に読みとれる人物造型・構成・文脈のいずれにも見られる国策的要素と非国策的要素の二重性を明らかにしながら、戦時下の雑誌『婦人公論』の編集方針との関連が追求されている。さらに本作品に描かれている母子像を『婦人公論』の国策プロパガンダとの関連から解釈を試みている。第五章では『散華』に描かれている「玉砕」と病死という対照的な二人の若者の死が並存する作品構成の意図が分析されている。「玉砕」による死については、ファシズム傾向の強い雑誌『新若人』との関連が明らかだが、ただもう一つの病死を並列させていることによってその意味にいかなる変容がもたらされているのが考察されている。第六章では、太宰の『佳日』が『四つの結婚』という国策映画として上映されるプロセスが追求されている。特に『佳日』に描かれている〈笑い〉の二重性が、映画化されるプロセスの中でどのように変容しているのかを明らかにしながら、太宰文学の〈笑い〉の二重性が意図するものを考察している。そして映画ではその〈笑い〉の二重性の一方の非国策的要素を脱落させることによって、国策的要素が強化されてゆくプロセスが捉えられている。第七章では、太宰文学の中でもっとも国策的要素が強いといわれている『惜別』を取り上げて、その中に描かれている「独立親和」の意味の二重性を明らかにしている。すなわち、語り手の語りのうちに国策的な「独立親和」の意味とは異なる新しい意味が見出されることを明らかにしている。

最後に本論文は、いわゆる太宰の国策小説といわれている作品の分析を、「アンビバレンスな姿勢」によるという仮説にもとづいて行ったことを指摘し、分析の結論として、それぞれの作品から読み取れる国策のプロパガンダに対する太宰の姿勢には、一方で同時代の民衆の心を自身の心とするとともに、いま一方ではその心とは距離を置かざるをえない曖昧性が見て取れることを明らかにしようとした強調としている。著者はその太宰の姿勢をアンビバレンス意識と規定し、そこに戦時下という個人の意志の自由が限られていた時期の作家太宰の執筆の姿勢を捉え、戦時下の太宰文学に対する新たな評価を試みようとしたと結論づけている。

## 審査の結果の要旨

本論文は、戦時期における太宰治の文学をメディア・読者との関係の中で捉えようとした、いわゆる文化論的文学研究に属するものである。著者がこのような方法論を採用した理由は、この時期の太宰文学の評価が分裂していることに疑問を持ち、著者なりの解答を与えるためであったと判断される。すなわち、従来の戦時期太宰文

学の評価は、一方では国策小説として全否定する方向であり、いま一方では、国策とは距離を置いていたとすることで、芸術至上主義者太宰治を擁護しようとする方向である。著者は、このような相反するベクトルをもつ評価の分裂がどうして起こったのかに関心を向け、むしろその分裂をもたらした秘密に戦時期の太宰文学の性格があるのではないかという仮説を立て、それにもとづいて対象の作品に分析を加えていくという方法をとっている。

その方法として、まず戦時下の状況を太宰がどう捉えているかという観点から、本論文が第Ⅰ部で女性独白体という文体に着目したことは、第Ⅱ部において著者が抱いた疑問に解答を与える前提となるもので、本論文全体の構想から見て鋭い着眼点の提示であったと評価される。具体的には、第Ⅰ期の三章にわたって女性独白体の採用が雑誌メディアの購読者層（読者）との関係にあることを明らかにし、その模索が岩波書店版『ユリシーズ』（昭和一〇年刊）の翻訳文体の受容にまで及んでいたとするのだが、このような問題発掘の独創性には見るべきものがあり、またその考証的研究自体が太宰文学研究の新たな領域を切り拓いてもいる。

この第Ⅰ部の論考が第Ⅱ部の冒頭に当る第四章に位置づけられる『十二月八日』のテキスト分析の視点を提供するものとなっている。本章の考察において、主人公の主婦のまなごしから捉えられる戦時下の緊張、それに反して戦争に無頓着な夫（作家で、太宰治の分身と考えられる）の行動、この両者に実は国策小説の方向性に向かうベクトルと、それとは逆に、国策から距離を置こうとする方向性のベクトルが同一作品内で統合されることなしに並存している状況が分析されている。この分析の成果は、従来の評価の分裂がこのような作品構造に見られる相反するベクトルのいずれかに重心を置いた結果であることが明らかにされている。

この『十二月八日』に見られるような特徴が戦時期の太宰文学をつらぬいていることが以後の各章で証明されてゆくことになる。すなわち、まず『散華』論では二人の若者の「玉砕」と病死の並存に、さらに『惜別』論では「独立親和」という国策的スローガンに非国策的意味を読み取る語り手（老医師）の姿勢に、というように相反する二つのベクトルが一貫してとらえられてゆく。この一連の考察は説得的であり、従来の評価の分裂がどこに起因していたのかを論証ししていると認められる。

なお付足すれば、第七章の『惜別』の素材となった魯迅伝を考証して、それが竹内好の『魯迅』（昭和一九年刊）ではなく、小田嶽夫の『魯迅伝』（昭和一六年刊）であったことを明らかにしえたことも本論文の成果と認められる。太宰文学の考証的研究が重要であることを再認識させるものである。

ただ著者は、戦時期の太宰文学の作品から読み取れる二重構造はどちらか一方に傾くことのない曖昧性のままに置かれていると結論づけ、それ以上に論述を展開しようとはしていない。確かに、同時代のメディア・読者と作家の思想性との拮抗が太宰文学をどちらにも傾かない曖昧性とどめたのかも知れない。後年作家が自殺した軌跡からそのように結論づけざるをえなかったのだろう。しかし、一個の主体の内部で相反するベクトルをもつ両極の思想が共存できた太宰の精神の特異なありようにもっと迫ることも可能なのではなからうか。また雑誌メディアに関する資料不足のせいも、雑誌メディアと購読者の関係も概説的なレベルにとどまっているように見受けられた。そのことは『佳日』の映像メディア論にも指摘できる。

しかし、本論文の立てた独自の構想による論述は、従来の太宰文学の研究史に新たな成果を加えた点で十分評価できるし、また考証的研究にも成果をもたらしている。以上二点の成果は論述の不足を補うに十分であると認められる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。